第３回瀬戸市小中一貫校開校準備委員会会議録

▽日時：

平成 30 年 1 月 18 日（木）午後 7 時 00 分から 9 時 00 分まで

▽場所：

瀬戸市文化センター　22 会議室

▽出席者（順不同、敬称略）：

【瀬戸市小中一貫校開校準備委員会委員】

木村光伸、鈴木賢一、鈴木健二、横山洋、田中直美、水野富士夫、矢野桂子、岡村肇、加藤和久（代理者出席）、小澤勝、高島知久、加藤和守、深見和博、加藤髙明、西原勇

【市】

教育部長　涌井康宣、学校教育課長　松崎太郎、経営戦略室 室長補佐　大岩三明、地域活動支援室 室長補佐　長谷川武宏　ほか

▽欠席者（敬称略）：

【瀬戸市小中一貫校開校準備委員会委員】

寺田和夫、右高恭子

▽議題等：

１　あいさつ

２　議事

（１）小中一貫校カリキュラム編成について

（２）学校運営などについて

（３）学校跡地について

（４）その他

３　その他

▽議事内容：

１　あいさつ

委員長：今回の議事の１番大きなポイントは、小中一貫校におけるカリキュラム編成についての中間取りまとめであると思う。委員の皆さまからご意見をいただきながら、教育のあり方を考えていけたらと思う。教育で一番難しい点は、教育の成果はどうかと問われた時に、形や数値でお示しす

ることである。成果が見えないことや、抽象的にしか表せないことは良くないのではないかと感じる。第２次瀬戸市教育アクションプランをベースに教育を進めてまいりましたが、検証をしながら進めていかなければならない。様々な形で検証をしながら進めていただいているが、そういうものが基になり、小中一貫校のカリキュラム編成につながっていくと感じる。本日のカリキュラム中間報告を聞かせていただきながら、今までの取り組みだけではなく、新たな教育目標についても見据えながら、この会を進めていきたいと思っている。

事務局：鈴木健二委員が本年度初めてのご出席となりますので、簡単に自己紹介をお願いしたい。

鈴木健二委員から自己紹介がなされた。

２　議事

（１）小中一貫校カリキュラム編成について

１）中間報告

【資料１－１】に基づき、事務局から、小中一貫校のカリキュラム中間報告についての説明がなされた。

事務局：今回の中間報告では、小中一貫校において新たにどのようなことが行われるかを中心に９年間の学習プランの一部をお示しさせていただいた。小中一貫校において、大きく変わらない部分については、学習内容である。１年生から６年生までは小学校新学習指導要領、７年生から９年生（中学１年生から中学３年生）までは、中学校の新学習指導要領を基盤として、必要な部分に関しては、付け加えたり、整理したりしながら、教育課程を編成し授業を行っていきたいと考えている。大きく変わる部分としては、学習の方法である。子どもたちの発達段階を考慮し、４・３・２の枠組みなどを活用しながら、９年間の成長を見通した、一貫性のある教育活動を進めていきたいと考えている。資料については、小中一貫校における新たな取組の一部をお示しさせていただいた。10 個の新しい取組を示し、星印については、瀬戸市の特色ある取組を表している。キャリア教育の説明の前に、教育長よりこれからの教育の在り方などについて、話をさせていただきたい。

教育長：本市が取り組もうとしている教育は、今までにはないものとなるため、教員自身も暗中模索というような所がある。社会に開かれた教育課程と

は何か、という点について、私からお話をさせていただき、この後の議論で深めていただきたいと感じる。まず、新学習指導要領は、今までの学習指導要領とは違い、真髄をしっかりと掴んだ上で、取り組むことが必要になる。2030 年の予測不能な社会に対して、子どもたちの未来のために、どんな教育を施すかという大きな命題をもっている。教育課程の中で、何をいつ誰がどのように教えるかについて、本市も具体的に作成しているところであるが、ポイントとして私が考えることは、目の前の子どもをしっかり見るということである。先生だけではなく、保護者や地域の人々も子どもをしっかり見るということが大切である。今回の大きな改訂の意図としては、140 年積み上げられた日本の教育から、新しい時代に相応しい学校文化を創るという、それぐらい大きな変革に取り組もうとしている。未来に対応していくためには、受身ではなく、一人ひとりの可能性を最大限に引き出すことが大切である。例えば、道徳心を集団で捉えるのではなく、それぞれの子どもたちがそれぞれの想いがあるということをしっかりと掴み、その子どもたちの個性を一人ひとり伸ばすことができるような授業展開をこれからの先生方はしていかなければならない。その意識改革の部分が必要になる。また、障害の有無に関わらず、一人の人間として自分の存在が認められること、社会をより良くできるという力があるということを実感することや、子どもたちにとって一人ひとりの活動が身近な地域や社会生活に影響を与えることができるということを子どもに実感させられるようにすることが大切である。学校目標を地域や保護者の皆さまと共有し、学校が果たさなければならないこと、保護者が果たさなければならないこと、地域が果たさなければならないことをお互いに共有することが重要である。単純に、様々な人が学校に来て子どもと関わることは手段であり、大切なことは周りの大人が子どもたち一人ひとりに多方面から関わり、その子の成長を見届けることが大人の仕事であり、こうした循環させるシステムをこれからの教育は作らなければならない。色々な教育や教科を通して、子どもの個性を伸ばし、誇りをもった生き方をすることができる子どもたちを育てることができることが最も大切であると考える。私からの言葉は理念的なものになってしまうが、全ての事柄において、芯の部分が必要になるという視点だけは忘れないようにもっていたいと感じる。

事務局：今のお話からもありましたように、教育活動の中で、地域、家庭、学校がそれぞれ役割を果たしながら、子どもたちを成長させていくということで、小中一貫校においても、様々な教育活動において、地域、家庭と

協働しながら教育活動を進めていきたいと思っている。今回は瀬戸市が先進的に進めてきたキャリア教育を一例とし、地域との協働について皆さまからご意見いただけたらと思う。

【資料１－２】とスクリーンを用いて、事務局からキャリア教育について説明がなされた。

事務局：キャリア教育は「一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されている。瀬戸では、キャリア教育として、様々な教科や総合的な学習の時間の中で、自分らしい生き方を実現するために、その基盤となる能力や態度を育ててきた。小中一貫校となる７校を中心に、これまでどのようなキャリア教育が行われてきたのかについて紹介をさせていただく。【資料１－２】については、今年度７校において商工会議所が講師を派遣して行ったキャリア教育の実践である。それぞれの活動に専門的な講師を派遣していただき、協働して実践を行っている。また、商工会議所から講師を派遣していただく以外にも、学校独自で講師を依頼する実践もある。これまでの瀬戸のキャリア教育について、成果といたしまして、地域や企業の力をお借りしながら、各校で特色のあるキャリア教育が展開されてきたことである。それぞれの実践は有意義で魅力的であると感じる。一方、課題としては、それぞれの実践の系統性が曖昧であり、小学校は小学校、中学校は中学校で完結していることである。実態としては、小学校教員が中学校でどのようなキャリア教育が行われているか知らない状態でもあり、逆に中学校教員が小学校でどのようなキャリア教育が行われて、現在に至っているのかが把握できていないことが現状である。それを受け、小中一貫校では、地域や企業、専門的知識を持った人材や施設のさらなる活用を目指し、９年間を見通した系統的な実践を行っていきたいと考えている。小中一貫校では、キャリア教育で育成したい基盤となる能力や態度を明確にしたいと考えている。そして、今まで培ってきた実践をどの時期にどのような能力や態度を育成していくのかを整理していきたいと考えている。その上で、これまでの瀬戸の成果である、地域や企業、専門的知識を持った人材や施設をさらに活用することで、キャリア教育を発展させていきたいと考えている。皆さまに地域との協働のあり方をイメージしていただくために、一例としてキャリア教育を例にあげさせていただいた。地域との協働のあり方について、委員の皆さまにご意見等を伺えたらと思う。

委　員：冒頭で委員長から、教育を評価することは難しいとのお話があり、もっ

ともだと感じているが、本年度の祖東中学校の学校評価のアンケートで生徒分のアンケート集計において、現在の中学３年生の結果が、昨年度に比べはるかに肯定的な結果となったことを、この場をお借りして、報告させていただく。現在の祖東中学校でも、地域の方々に様々な形で助けていただいているが、具体的には部活動において、地域の方々が約半分の部活動に講師として入っていただいている。顧問である教員は全員が専門であるわけではないため、地域の方々に助けていただき、大変助かっている。また、陶芸美術部についても、地元の方々に教えていただき、大変助かっている。読み聞かせ等の活動でも、地域の方々に助けていただいている。地域の方々と話をする中で、「普段、地域に住んでいると、中学生の悪い噂ばかりを聞いてしまう。しかし、学校に入り、生徒たちと様々な活動をすると、噂とは反対に子どもたちはとてもよく頑張っているということが分かった。学校のこともすごくよく分かった。」と言われたことがある。教育長の話の中でも、「子どもをしっかり見る」という話があったが、このように実際に子どもを見ていただくことで、子どもへの理解も深まり、さらに力を貸していただけるのではないかと実感している。もう一つ言われることとしては、「いつでも良いから来て下さいね。と言われても、学校は敷居が高いので、入りづらい。」ということを言われたことがある。学校側としては敷居を高くしているつもりは全くないが、地域の方からすると、気楽に入ることのできる場所ではないのかと実感している。そのため、地域の方々が気楽に入ってこられるような、学校を作っていくことが、私たちの役目だと感じている。

委　員：開校まで２年と迫っているが、ハードよりもソフトが重要になってくると感じている。今回の小中一貫校においては、交流スペースや地域活動室も設けられるということも踏まえ、学校側から地域へお願いをするだけではなく、地域側からも「子どもたちのためにこんなことがあったら良いのではないか。」という働きかけができれば、良いと思っている。また、キャリア教育について、瀬戸市は 10 年以上進められており、全国的にも高い評価を受けていると感じている。小学校と中学校が上手くつながり、それぞれの年齢に応じた適切なキャリア教育を通して、力を身につけてほしいと考えている。カリキュラムについて、体力の向上は重要であると考えるが、『補助運動の充実』という表現の仕方では弱く感じるため、もっとしっかり取り組むことが伝わるようにしていただきたい。また、瀬戸市は万博を経験した都市でもあり、学校では様々な形で環境教育が行われているため、『環境教育』も視野に入れながら考えていただ

きたい。

委　員：先ほど他の委員からの話の中でもあったが、「学校の敷居が高い」ということは、よく言われることである。また、地域から働きかけることができれば、地域の方々がもっと学校に入ることができるのではないかと考えている。そのようなことを含めて、サポートセンターでは、地域と学校の協働活動として進めてきた。今までのような、地域から学校への一方的な支援ではなく、お互いが対等な立場で、社会全体で子どもたちを育てていかなければならないという、学校の変化であると考えている。そのことについて、今年度は地域学校協働ボランティア研修会ということで、地域の方に集まっていただいているが、地域の方々から、瀬戸に対する想いや瀬戸の子どもたちに向けた愛情がとても伝わってくる。このように、「学校と関わりたい」と思っている方々が地域にはたくさんいらっしゃることがわかったので、これからこの地域の方々とともに、新しい瀬戸、敷居の高くない学校づくりをしていきたいと思っている。

委　員：９年間を見通した系統的なキャリア教育の実践ということがあるが、具体的な着地点はあるのか。評価として採点することなどは考えられているのか。

事務局：キャリア教育は職業観を育てるだけに捉えられてしまいがちであるが、「生き方」を学習することがキャリア教育の中の大きな目標であると考えている。そのため、どこを目指していくか、検討中のところもあるが、自分らしい生き方について、子どもたちが自分なりの考えを持っているということが中学３年生（９年生）の目指す姿であると考えている。教育は、中学３年生で終わりではなく、キャリア教育についても、高校、大学、社会人になってもつながっていくものであると思うため、自分らしい生き方というものが、進路に関わる中学３年生の段階においても、子ども自身の中にあると良いと考えている。また、先ほどご紹介した様々な実践だけではなく、例えば道徳の授業にある「思いやり」「礼儀」などについても、キャリア教育の一つとして進めていき、自分らしい生き方につなげていくことができればと考えている。

委　員：昨年教育長から、公民館講習会の中で、地域との連携について具体的にお話をしていただいた。そのことにより、公民館関係者は目が開き、小中一貫校に対しても想いをもつことができた。そのことを踏まえて、「地域から学校への働きかけ」については、公民館や交流センターは人材の集まるところであるため、機運があれば、学校への働きかけもできるようになると考えている。次に、カリキュラムの英語教育について、３・

４年生の外国語活動、５・６年生の外国語の導入とあるが、指導要領にもこのような書き方がされているのか。また、体力の向上について、幼保との連携とあるが、これは大変良いことであると思う。小中一貫校の協議を進める中で、小中の連携については、大きな目標であるが、幼児教育についてもしっかりと目を向けていくことが大切だと感じている。また、特別支援教育について、他機関との連携はとても大切なことであると感じたが、これを基にして、地域の方々が特別支援学級に通っている子どもたちや障害がある子どもたちの理解を深めるような動きが出てくると良いと思う。先日の出初式や教育フォーラムで手話通訳をしていたところがあったが、障害がある人たちも地域で支えていく必要があると感じたため、ぜひこの取り組みを生きたものにしていただきたいと感じた。

事務局：現学習指導要領であると、５年生から外国語活動ということで、主に英語に慣れ親しむということで活動が行われている。新学習指導要領になると、３・４年生で外国の文化に慣れ親しむ、そして、５年生から教科として外国語が導入される。しかし、瀬戸市においては、３・４年生からではなく、１・２年生から外国語活動として英語に慣れ親しみ、その後に繋げていきたいと感じている。

委　員：カリキュラムを実効性のあるものにするために、大切なことは、全ての教育活動を貫く教育観であると考えている。色々な教育活動があるが、それらがバラバラに行われていては、効力が弱くなってしまう。例えば、教育方針として「つながる力」があるが、全ての教育活動で、それを意識した教育活動が行われなければ、そのような力はつかない。全ての教育を関連づけながら考えなければならない。全国様々な学校を視察するが、小学校６年間の積み重ねが見えない。中学校であれば、３年間の積み重ねが見えない。学年が進むにつれて、悪くなる学校もある。その原因としては、学校の教育目標が先生たちと生徒で共有し、それに向けた教育活動が意識されていないからである。そのため、６年間や３年間でも積み重ねを見出すことが難しいので、９年間となると、より一層その点を十分に踏まえなければ、それぞれの活動がバラバラになってしまう。そのため、どんな子どもを目指すのか、どんな教師を目指すのか、どんな保護者を目指すのか、そのことを十分に考えることが必要である。そのことが、カリキュラムを良くする前提であると感じる。社会に開かれた教育課程とあるが、ある小学校の道徳の研究で、地域にある素材を道徳の授業で使うという発想で取り組まれていた。そのため、研究発表会

の際には、全クラスにおいてすべて違う地域素材で道徳の授業が展開された。そのことにより、教員の意識が変わり、子どもの意識も変わった。この学校の良かった点は、「まずは学校が地域を知る」というそこから始めたところが良かった。地域にお願いをするだけではなく、まずは学校が地域を知ることから始めた。このように、社会に開かれた教育課程というものの中にも、道徳教育を十分に生かすことができる。また、先ほど述べた、カリキュラムを貫く教育観の中にも、道徳教育が軸になってくると感じる。

委員長：10 年以上瀬戸でキャリア教育を進めていく中で、子どもたちの声を聞いたことがないが、先生方一人ひとりがキャリア教育やキャリア発達について理解しなければ、子どもにも伝わらないと感じている。また、制服について「１～６年生までは私服、７～９年生までは制服」とあるが、これはなぜか。今までそうであったからであるか。６年生と３年生で分けるべきとも、分けないべきとも申さないが、それを説明できなければならない。一つひとつのことについて、子どもたちや市民の方たちに説明できなければならない。また、カリキュラムの中で、どのように高校へ繋げていくのかが一切ないことが不満である。ほとんどの生徒が高校に進学していくため、小中一貫校の成果として、どのように高校へ繋がっていくか、そのことについても、しっかりと踏まえるべきである。

委　員：英語教育を平成 32 年から実施していくとのことであるが、教員の指導力は伴うのか。

事務局：英語を専門で勉強してきた教員ばかりではないが、見合った教員の指導力が身につくように、既に研修は始めている。また、文科省から示される教材を示して、どのように教えていくかという勉強も行っている。まだ十分ではない部分もあるが、既に準備を始めているという点をお伝えさせていただく。教員の教えるという意欲が伴うことが大切だと感じている。また先ほどのお話していただいた、学年をまたぎ、いかに繋いでいくかということと、本質を知って教育に取り組むかということについて、仰るとおりだと感じており、その部分がなければ教育は本物にならず、質も上がらないと感じる。これまでの教育は一つひとつのプログラムをこなすだけで精一杯だったのではないか、というところから検討をするよう肝に銘じて取り組んでいきたい。

（２）学校運営などについて

１）校名候補の選定結果

【資料２－１】に基づき、事務局から、小中一貫校の校名候補（３点）についての説明がなされた。

２）ワークショップ中間報告

【資料２－２】に基づき、事務局から、ワークショップの中間報告についての説明がなされた。

事務局：第３回目については、２日前に終わったばかりなので、まだまとめはできていないが、各学校でどのようなPTA活動を行っているか、７校で共有を図り、現在の課題についても共有した。現状としては、公民館や自治会などとも繋がりを持ちながら、様々な行事を行っている学校もあった。課題としては、ほとんどの学校で同じであったが、人手不足ということがあげられた。そのことを踏まえて、小中一貫校ではどのようなPTA活動を行うことができるかということについても話し合った。

副委員長：地域と学校との関係を整理しながらワークショップを進めているが、教育課程に直接的に関係してくる部分と、直接的ではない部分とに分けられてくるとは思うが、現段階ではそこまでの整理に至っていないため、最終的にどのような方向性になるか、模索中である。ただ、２回目のワークショップでは、市外の先進的な活動を教えていただき、今までのやり方を踏襲しなくても良いということを、実例として教えていただいた。そのことを踏まえ、そのまま真似をするのではなく、瀬戸はどのようなPTA活動を行っていくのかということを考え出しているところである。その中で地域と学校を繋ぐ役割をしていただく方が必要なのではないかと考えている。カリキュラムのお話の中で、系統性ということがあったが、地域は系統性を持って動いているわけではないため、その整理をしていただく役割の方が必要になると考える。また、小中一貫校の施設として、中央に“登り窯ステップ”というスペースがあるため、そこを是非活用し、地域と学校を繋ぐ場ともなってほしいと思っている。

委員長：今のご発言の中で、とても重要な部分は、ソフトのことを考える際には、併せてハードの部分も考えなければならないということである。ハードだけ、ソフトだけで動いていくわけではないため、併せて考えていく必要がある。

（３）学校跡地について

１）利活用検討の進め方について

【資料３－１】に基づき、経営戦略室から、学校跡地の利活用検討の進め方についての説明がなされた。

委員長：跡地については、本来であれば本委員会で議論する内容ではないが、小中一貫校との関連ともなるため、皆さまにも内容について、ご理解いただければと思う。

委　員：祖母懐連区に学校ができることになるが、市の方へ昨年度バスが通ることができる道を作ってほしいと要望を出したが、難しいという回答があった。工事車両については、私有地を借りて通るとのことであるが、私有地は長い間通ることができるわけではないと考えている。そのため、県道３３号線から繋がる道を作ってほしいと要望を出したが、難しいという返答があった。現在ある道を修正等するだけであるか。

委員長：現在のこの委員会のメンバーでは、返答することが難しいと思うため、持ち帰っていただき、新しい学校建設に係る様々な課題があるという点で議論を深めていただけたらと思う。

委　員：私の自治会では、跡地利用が最も重要な課題ということで議論が進んでいる。今の市の方のお話を聞くと、市が主導的な役割をされて、縛りがとてもあるように感じるが、連区が主体でも良いように感じる。また、市が積極的なようには見られない。そのため、自治会の議論が先に進んでしまい、後から市のほうから、それはできないというようにならないか懸念している。

委員長：先ほどの市からの説明としては、跡地活用をするために、最低条件を市の方で整理するという話だったかと思う。また、平成３２年の３月までは、既存の学校は学校施設としてなくてはならないため、その点についても整理をしていかなければならないとの説明であったと思う。

経営戦略室：委員長の仰るとおりで、地元地区の皆さまで協議をするための最低条件となるところを、現在整理しているところである。積極性が伝わっていないという所については、申し訳ないところではあるが、精一杯進めさせていただいておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

（４）その他

１）Ｑ＆Ａについて

【資料４－１】に基づき、経営戦略室から、学校跡地の利活用検討の進め方についての説明がなされた。

委　員：冒頭で教育長から、学校、保護者、地域で同じ目標をもち、同じ目線の中で進んでいきたいと言われ、私も同感している。地域の目線からお話

をさせていただくと、７校それぞれの地域とともに歩んだ文化や歴史があるかと思う。その歴史を踏まえた上で、小中一貫校の「地域とともにある学校づくり」を進めていただきたいと思う。現状でも、公民館や自治会と連携をして行っている事業等もあるため、それぞれの地区がどのような取り組みを行っているかという検証も踏まえて、小中一貫校としてどのように地域との連携を深めていくかということを進めていただきたい。また、学校と地域を繋ぐネットワークになるものは、PTA だと考えている。その PTA の方達が、お子さんが成長した後は地域を支えていくことになると考えるため、色々な経験を積んでいただき、今後に繋げていただきたいと思っている。また、跡地利用についてだが、私の地区では、小中一貫校に関する委員会として、学校教育に関するものと、跡地利用に関するものを二つ立ち上げた。しかし、地域にとっては同時並行で進めていかなければいけないと考えている。ただ、物理的に平成３２年４月から両方とも同じように進めることはできないが、中長期的な視点で公共施設の一貫としても、十分に考えていただきたい。最後に、キャリア教育について、陶芸でやきものを作るだけでなく、瀬戸の歴史や文化、背景なども同時に知っていただける機会を設けていただき、瀬戸の歴史を語ることのできる子どもを育てることができればと思う。

教育部長：学校の先生が行う授業だけがカリキュラムという訳ではなく、地域との関わりも含め、９年間でどのような子どもたちを成長させていくのかということについて、再度検討を深めさせていただき、今後具体的なプログラムなどをご提示できればと考えている。また、跡地利用について、この委員会ではご報告という形になるが、同時に考えていかなければならないことであると認識しているため、地元の皆さまにより一層、様々な情報をお伝えしなければならないと宿題とさせていただく。

３　その他

事務局：次回、本委員会については 3 月 22 日（木）瀬戸市役所４階大会議室で予定している。次回については、校名決定のお知らせをさせていただく予定であるため、午後３時から校名決定セレモニーの開催を予定している。その後、開校準備委員会を開催する予定である。委員の皆さまにつきましては、改めてご連絡させていただく。

以上